

# 日奈久温泉街の街並み変遷に関する研究

— 現存する木造旅館を事例として —

2010112358 宮尾 采佳

都市計画主専攻 指導教員：渡辺 俊 教授

## 1. 研究背景・目的

熊本県は多くの温泉地があり、源泉総数は全国5位である。その中で、熊本県八代市の南にある日奈久温泉は、歴史の古い温泉街であり、木造二・三階建ての旅館が街並みの特徴である。かつては泉都と呼ばれ温泉地として栄えていたが、現在はひなびた温泉地となっている。日奈久温泉は泉質とともに木造二・三階建て旅館が8軒も現存しているという特徴も持っている。既往研究では、磯田らによって2001年から日奈久温泉の街並みについて研究がされており、また磯田らは全国に残存する木造三階建旅館の現状について研究しており、日奈久温泉の8軒は全国で7番目に多いことが分かる。このことから木造三階建旅館が8軒も現存するという事は珍しく、維持保存し活用する意味があると考えられる。また、松村他によって2007年から日奈久温泉街の生活景についての研究が行われている。しかし、木造旅館の変遷を経年的に明らかにし、旅館の今後の動向について調査されたものはない。そこで本研究では、日奈久温泉の時代による変化を、この温泉街の特徴である木造二・三階建て旅館の変遷とともに明らかにし、各旅館家屋の今後の動向と課題について検討する。そこから旅館の維持発展・温泉街の発展の一助となることを目的とする。

## 2. 研究方法

日奈久温泉街を対象地とし、調査は現存する木造旅館を中心に行う。日奈久温泉街とそこに現存している木造旅館17軒（営業中12軒、廃業5軒）について、写真データを収集し外観の変化を調べ、文献によってどの時代に何が起こったのかなどを調査する。また現在営業中の各旅館の経営者にヒアリング調査を行うことで、増改築や外観の改修などをより詳しく経年的に追い、日奈久温泉街と各旅館の変遷を整理する。

## 3. 日奈久温泉街の歴史：文献調査

まず日奈久温泉街について知るために文献調査を行った。「日奈久の歴史：郷土史」を主に使用し調査を進める。八代市の統計資料や日奈久温泉街の観光資料なども使用した。

日奈久温泉は熊本県八代市日奈久町の街中に湧く、閑静なたたずまいの温泉。応永16年（1409年）に発見された古い歴史を持つ温泉である。温泉が発見されてから、この町を大火災が襲い、これによって住宅に「なまこ壁」が用いられるようになった。現在も「なまこ壁の住宅」は日奈久地区の街並みの一要素となっている。明治時代に本湯（温泉センター）が藩営から日奈久町独自の経営にゆだねられ、多くの人が訪れた。

本湯周辺で源泉が多く発見されたため旅館は本湯周辺に集中していた。国道が開通し、九州鉄道が八代まで延長すると、宿泊客が増加し始めた。旅館は新装し、木賃宿も旅館として改築した。漁村だった街は、温泉の効能の評判から温泉街へと変貌していった。昭和12年に支那事変が起こると、日奈久温泉は軍の療養所となった。日奈久の地には、兵隊を客にしようと赤線が増え、戦傷者が去った後も赤線が残っていたため、それを目当てに接待のため団体客が多く訪れた。赤線が禁止され、昭和40年代を境に観光入込客数は減少していく。ふるさと創生事業により県内に温泉地が増えたことも観光客の減少につながったと考えられている。観光客が減少し、町に活気がなくなっていくと旅館の軒数も次第に減少していった。近年、日奈久温泉を活性化させようとする取り組みから、イベントなどを精力的に行い、日帰り客数は増加したが、宿泊客数は減少し続けている。また、2009年に日奈久温泉の旅館金波楼は国の登録有形文化財に登録された。登録を申請する際、市は他に新湯旅館、柳屋旅館にも声をかけ、まとまって登録されることを望んだ。しかし2つの旅館は登録申請を拒否したため、金波楼だけの登録となった(図1)。



図1 登録有形文化財である金波楼

## 4. 日奈久温泉街の現状：現地調査

日奈久温泉街の現状を知るために現地調査を行った。

<対象>

現存する木造旅館の17軒を中心として、日奈久地区一帯

<調査日時>

平成25年11月5日～8日

現在も営業中である木造旅館は、まちの歴史を感じる要素となっており、各旅館が今ある旅館を大切にし、きれいに手入れされているのだが、県内の黒川温泉のように景観づくり

のため一体感を出そうという意識は見られなかった。また木造ではあるが増改築の際にRC造の客室を増築し連結させた旅館や、外観からは木造とわからない旅館もあった。これらの旅館は日奈久地区が防火地域に指定されたことや、消防法によって木造旅館が建築できなかったことによる。廃業した旅館が現在どのようになっているか調査すると、そのまま残っているものも多いが、他の旅館や公衆浴場の駐車場になっているものもある。しかし、ただの更地を駐車場とっているものも多く、温泉街の景観を損ねる一因となっているのではないかと考える。現存しているが営業していない木造旅館を調査すると、営業していないが、中に人がまだ住んでいる旅館は、状態がよく営業時とあまり変わっていない印象である。しかし、売られている旅館や、中に人が住んでいることが確認できない旅館は状態が悪かった。玄関の窓が割れていることや、障子がぼろぼろになっている様子が確認できた。廃業してしまった後、何か別の用途で使われている旅館はないかと調査してみたところ、織屋という旅館は現在種田山頭火の資料館として使用されている。多幸満荘という旅館は、客室をアパートとして貸していたようだが、現在入居者がいるのか不明であるうえに、現在もアパートとして運営しているのか外観ではわからなかった。

## 5. 各木造旅館の経緯と現状：ヒアリング調査

文献調査や現地調査をふまえて、現在木造旅館を運営している人にヒアリング調査を行った。

<対象>

現存する木造旅館の17軒のうち、営業中である木造旅館（日帰り温泉を含む）12軒

<調査日時>

平成25年11月5日～8日

<調査項目>

①増改築の有無・実行年 ②今後の増改築の予定 ③外観改修の有無・実行年 ④今後の外観改修の予定 ⑤今後の旅館経営の展開 ⑥⑤のために必要なこと ⑦その他

ヒアリング調査を通して各旅館の変遷とともに歴史についても知ることができた。結果を踏まえ各旅館の経年変化を並べ年表をつくる(図2)。そこから、本湯付近に自然湧出の温泉が発見された明治時代後半や、昭和5年(1930年)あたりで旅館を創業したり、増築したりする旅館が多いことがわかった。その後は昭和35年(1960年)あたりが多くなっている。昭和5年あたりは九州鉄道が八代まで延長し、遠方からの宿泊客数が増加した時期であり、昭和35年あたりは日奈久温泉の宿泊客数がピークにさしかかるころである。このことから街の情勢の変化に合わせて成長してきたことが分かる。

今も営業を続けられている旅館は、昔からある旅館が多く、また何か信念を持って営業をしている旅館が多い。このように企業努力、経営努力をしてきた旅館がほとんどであった。しかし今後の旅館経営に意欲的でないところが多かった。経営者が高齢であるためもう町おこしのようなことをする気もないようだ。次の世代に無理に後を継がせる気もなく、今

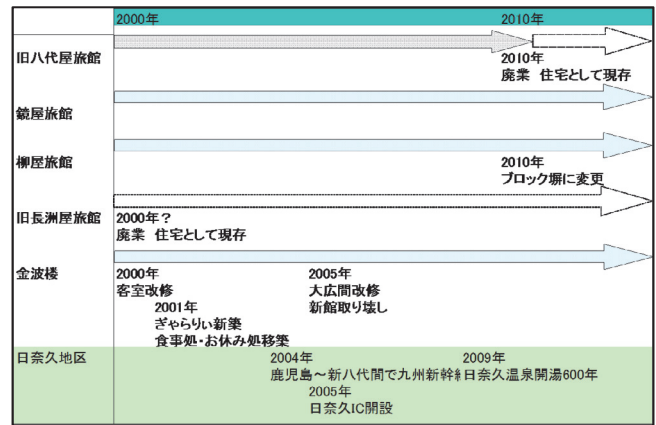


図2 各旅館の変遷年表（一部抜粋）

の代で終わってしまう旅館もある。一方で前向きな考えとして、夫婦共働きにすることによって、旅館を趣味のような副業として続けていきたいという考えもあった。

## 6. 総括

各調査を経て、日奈久の地は埋立地が完成したり、鉄道や国道が通ったりするたびに少しずつ変化していったと考えられる。現在営業中である旅館は昔のままの状態を維持し、歴史を感じるつくりとなっている。しかし、廃業してしまったままの旅館は老朽化が激しく、町にひなびた印象を与えている原因となっているようだ。

日奈久温泉街の課題は、観光客の減少・収入の減少・後継ぎ不足である。現在の日奈久温泉は観光客が減少し活気がない。旅館の売上げが減少したことによって、後を継ごうと考える人が少なくなり、多くの旅館が廃業し、これからも廃業していく旅館が出てくる。また収入が少ないことから、後継者がいても、本当に後を継がせるか考えてしまうようだ。ほかにも旅館ごとの考えが異なるため、日奈久温泉街をどうにかしようかと前向きに検討しても、意見が合わずにまちづくりが先延ばしになる傾向もある。今後も廃業していく旅館が出てくるため、それらの旅館が現在の廃業したままの旅館のようにならない工夫が必要である。また廃業していく旅館が減るように、多様な経営方法を考えていく必要がある。

## 参考文献

- [1]「日奈久の町並みガイドブック」、『八代市教育委員会文化課』, 2001-9-13
- [2]中原文敬「日奈久の歴史：郷土史」, 1970-12-12, 八代市統計資料
- [3]角田幸子, 下田貞幸, 磯田節子, 森山学, 勝野幸司「観光客へのアンケート調査による日奈久温泉街の魅力と課題 八代市日奈久温泉街のまちづくりに関する研究 その7」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2010年9月
- [4]松村恵, 西英子「日奈久温泉街のまち並み形成と変容に関する研究～生活景について～」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2007年8月